

展望

## 今詠うべきもの

大西 淳子

なにを詠むか苦悩する時がある。作歌を始めたころは、詠みたいものが泉のように湧いてきたが、そのあと徐々に素材が枯渇したという人もいるだろう。

二〇一九年六月の現代歌人協会総会にて、大島史洋さんが「今詠うべきもの」の話をされた。自分にとって一番大切なものを詠うべきだ。かつては、政治や社会や生き方を詠んでいたが、今はそれよりも「今朝の味噌汁の味」とおっしゃったのが、印象的だった。

味噌汁とは、社会の共通認識ではなく、自分の生活を、過剰に飾り立てることなく、フラットに詠うことだろうか。近刊の歌集から、少しあげてみる。

フランスパンつよく噛みやり暑にこもる  
日の唯一の運動として

花山多佳子『鳥影』

平等と思えぬいのち缶のなかアンチョビ  
ーが平らに並ぶ

平山繁美『手のひらの海』

青ねぎは屈葬されて真つ暗な野菜室にて  
冷たくなれり 門脇篤史『微風域』

おまえは生きているうち一度でも空を見  
たかと問う鶏肉に

佐佐木定綱『月を食う』

一首目、硬いフランスパンをつよく噛む。それを「運動」と表現したことで、口元の筋肉や顎が、わっしわっしと動くのが映像化される。咀嚼もしっかりしている様子で歯の働きも意識される。しかも「暑にこもる日の唯一の」である。外の世界と隔たり、家でも無い寂寂のなか孤独感が漂う。

二首目、缶を開けると、アンチョビが平たく皆同じように並んでいる。原材料はカタクチイワシ科の魚だが、規格化され妙に規則正しく並んでいることに違和感を覚えたのだろう。実際の命はそのように平等ではない。作者は産婦人科の看護師。様々な命の現場に立ち合っている。生活のふとした違和感が、心の隅にあつた感情を引き出したのだろう。

三首目、青ねぎは長いので、折り曲げて冷蔵庫に入れる。その様子を、青ねぎを主体として詠い「屈葬」と表現した。独自性のある

見立てである。さらに暗室で冷たくなつていたと言うことで、青ねぎにかつて体温があつたかのような生死のイメージが広がる。

四首目、鶏肉に向き合っている。食材としての鶏肉をニワトリとして、さらに翼を持つ鳥として再認識している。そもそも大空を飛ぶ鳥ではないが「空を見たか」と表現することで、大空を、そして自由を希求していたかのようなだ。「生きているうち一度でも」に、人生を思う。「おまえ」に問うているが、自身にも問うているのだろう。

いずれも生活の一場面を平明な言葉で詠っている。自分の行為を俯瞰的に見て単純化したは戯画化したり、物から受ける印象に感情を重ねたり、独自の見立てをしたり、物の見方を逆転し再認識したりしている。また、深く考えさせられるテーマも含んでいる。

角川「短歌」二〇二〇年五月号の特集は「日常・社会はどう歌うか」だった。表紙に「日記、ニュース見出し、キャッチコピーにならないために」とある。大切なことだ。

今詠うべきものは、目の前にある。なにを詠むか悩んだら、まず今朝の味噌汁をいつもと違う視点から見つめてみよう。報告だけ、説明だけにならぬよう、独自の捉え方ができるまで、じっと。